

復興デザイン会議 第1回全国大会

危機の中にある都市

2019年12月7日（土）・8日（日）

東京大学本郷キャンパス 工学部1号館

都市は危機の中にあるはずだが、日常の眩しい光の中で、忘れ去られたように、今日も地域は計画され、都市は設計され、さまざまな政策は其処彼処で遂行されているだろう。しかし一旦災害がおきれば、あっという間にそうした日常の風景は奪われ、人々は傷つく。阪神淡路大震災、中越地震、東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨、各地で歴史の中で繰り返されてきた災害に際して、地域は存亡の危機に直面し、当たり前の政策・計画・設計が通用しない過酷な状況に陥る。そんな中、私たちに何ができるだろうか。

自らに向けた問いを更新し続けながら、傷ついた地域に踏みとどまり格闘を続ける実践者と、長い時間、災害と地域の営みの機構解明に取り組む続ける研究者が、互いに向き合い、自らの取り組みをもとに、分野や立場を超えた議論を徹底的に行うこと、そのことによって、来るべき巨大災害と常態化する地域の危機の解決と復興に向けた知見の体系化を行うこと、その推進のための実践的な研究者と実践者のネットワーク構築を目指して、復興計画デザイン会議の第一回全国大会を、ここに開催します。

主催：復興デザイン会議全国大会実行委員会 / 事務局：東京大学復興デザイン研究体



プログラム

12月7日(土)

9:00-12:30

U-30 復興デザインコンペ 公開審査会・作品展示討論会

9:05 作品展示討論会(ポスターセッション)

10:30 最終プレゼンテーション

審査委員

内藤 廣 宮城 俊作 姥浦 道生
千葉 学 柄澤 麻利 羽藤 英二

13:30-14:30

小さな学びの復興 建築家の復興デザイン

乾 久美子

「土木との協働により小さな風景を取り戻す

釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館での試み」

日野 雅司

「陸前高田市立高田東中学校の復興プロセスと

建築家の役割について」

司会：千葉 学

14:30-15:30

復興現場の政策論 実務家による復興デザイン

姥浦 道生 趣旨説明

「住宅復興の全体像と被災者の意向変化」

菊池 雅彦 「被災者支援の枠組みとその背景」

赤川 俊哉 「山元町における被災意向の把握」

15:45-16:45

U-30 復興デザインコンペ 公開審査会・表彰

16:45-17:45

基調講演「都市史と復興」

伊藤 毅(建築史・青山学院大学)

18:00-18:45

研究論文部門 / 政策・計画・設計部門 表彰式

12月8日(日)

9:00-11:00

復興研究の萌芽 若手研究者と復興デザイン

小野 悠 「2010 年以降の復興研究の動向」

鈴木 さち 「マルチステークホルダーによる
大規模災害後の住宅再建プロセス」

佐藤 嘉洋 「大規模災害時調査の無回答世帯の実態と
無回答バイアス：2016 年熊本地震益城町での事例」

藤賀 雅人 「終戦直後の建築・都市計画制度検討と復興」

司会：本田 利器

11:00-12:00

U-30 復興デザイン討論会

司会：萩原 拓也

13:00-14:00

基調講演「海岸都市のリスク」

佐藤 慎司(海岸工学・高知工科大学)

14:00-15:00

Disaster Re-Design in Abroad 海外の復興デザイン

大津山 堅介 "Mobility, Immobility,
and Trapped Populations:
Comparative Case Studies in Myanmar and Florida, U.S."

益子 智之 "Planning and Design
for Post-Disaster Reconstruction in Italy"

Richard Martin Rinen

"Mapping Flood Control Projects:

An (Historical) Overview
of Flood Control Strategies in the Philippine"

司会：井本 佐保里

15:15-17:00

全体フォーラム

司会：羽藤 英二

1日目終了後、懇親会を実施いたします(会場内・立食形式、参加費：一般 2,000 円、学生 500 円)

会場

東京大学本郷キャンパス(東京都文京区本郷 7-3-1)

工学部 1 号館 15 号教室

※ポスターセッションは、2 階 社会基盤学専攻演習室で実施します。

資料

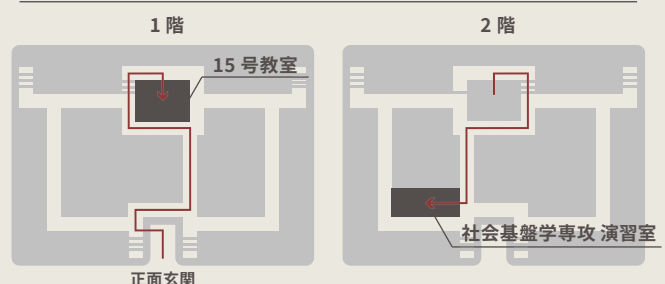
大会関連資料 URL

http://bin.t.u-tokyo.ac.jp/dss/publish_symposium_1.html

※右 QR コードからも大会関連資料を閲覧可能です。
※その他の大会情報は、大会 HP や Twitter をご覧ください。
http://bin.t.u-tokyo.ac.jp/dss/symposium_1.html
twitter @UT-ReSU



工学部 1 号館内案内図



復興デザイン会議 第1回全国大会 登壇者

実行委員長

原田 昇

復興デザイン会議全国大会第一回が開催され、復興デザインの研究者、デザイナー、実践者らが集い、その活動の輪を拡げる機会を持つに至ったことを大変に嬉しく思うとともに、今後の発展に期待します。

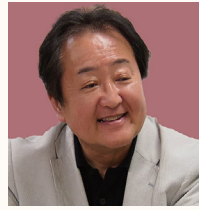


経歴 1983 年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。計画計画研究所研究員を経て、1985 年より東京大学工学部助教、助教授、同准教授を経て 1999 年より新領域創成科学研究科教授、2005 年に工学系研究科教授に異動し、工学系研究科長、東大副学長を務めた。GLAFS、まちづくり大学院、復興デザイン研究体などの教育活動に貢献。専門は都市交通計画。豊田都市交通研究所所長、日本交通政策研究会代表理事。国の審議会委員、学会の理事を歴任。

基調講演

伊藤 毅

東京大学の社会基盤学・都市工学・建築学の垣根を取り払って誕生した復興デザイン研究体には、新しい時代のとびらを押し開くようなエネルギーが充満しており、傍目にも眩しいかぎりでした。このたびの全国展開はそのセカンドステップ。一ファンとして今後の活動を期待とともに見守ってゆきたいと思います。



経歴 1984 年より東京大学工学部建築学科助手、助教授を経て、2000 年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授。2018 年青山学院大学総合文化政策学部教授。工学博士。専門は都市建築史。著書に『日本都市史・建築史事典』（丸善出版、2018 年、編集代表）『危機と都市』（左右社、2017 年、編著）『町屋と町並み』（山川出版社、2007 年）『都市の空間史』（吉川弘文館、2003 年、建築史学会賞）他。2012 年、建築学会賞（業績）受賞（吉田伸之氏と共同受賞）。

基調講演

佐藤 慎司

東日本大震災をはじめ、復興を議論する必要がある災害が頻発しています。復旧と復興の違いのひとつは、人間の心理学的な側面を中心に据えるかどうかであると思います。建設系分野が中心となって、復興をデザインする総合型の学術を創成していく必要があります。



経歴 高知工科大学システム工学群教授。専門は、海岸沿岸部の侵食、変形機構の解明と環境保全、津波高潮の防災対策など海岸工学全般。著書に『漂砂環境の創造に向けて』（共著・土木学会編）『海岸施設設計便覧』（共著・土木学会編）、東日本大震災の科学（共著・東京大学出版会）など。東京大学工学系研究科土木工学専攻修士課程修了後、同大学助手、横浜国立大学助教授を務める。建設省土木研究所河川部海岸研究室主任研究員、室長、東京大学教授を経て、現職。

各セッション登壇者



復興現場の政策論・U-30 復興デザイン 審査委員

蛸浦 道生

東北大学

復興はさまざまな制度的条件により変化するという問題意識のもと、より良い空間的復興に導くための計画・事業・規制等の制度やその内容について研究しています。



復興研究の萌芽

佐藤 嘉洋

熊本大学

現場の課題に対し研究はどう役に立っているのか。復興への思いを共にする方々へのフィードバックを常に意識した協働を大事にしていきたいと考えています。

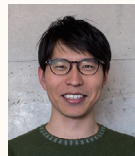


小さな学びの復興

日野 雅司

SALHAUS
東京電機大学

建築設計は直接の利用者に近い立場でデザインを行うことが多く、災害復興においてその役割・能力が必要とされていると感じています。



Disaster Re-Design in Abroad

益子 智之

早稲田大学

国際的な復興デザイン研究では、各国の復興に関する原則と基本方針を歴史的展開の中で把握し、各被災地域で試行された方法を的確に捉えることが重要であると考えている。



復興現場の政策論・復興政策計画設計賞 審査委員

赤川 俊哉

株式会社オオバ

復興には、被災者も支援者も常に行動と言動に責任をもち、被災者に対して優しさは罪。厳しさは現実。そして復興は希望であってほしいと常に思う。



Disaster Re-Design in Abroad

大津山 堅介

京都大学

復興のデザインによって漏れうる人々はいらぬのか、隅々までデザインしうるのか、デザイナーと被災者の分断は避けられないのか、議論を深めたいです。



復興研究の萌芽

鈴木 さち

UNESCO

大規模災害からの復興では、社会の中様々な主体の能力や資源を柔軟に活用するようなデザインが必要だと思います。



復興研究の萌芽

藤賀 雅人

工学院大学

「復興」デザインは、被災者の住宅「再建」と生業「再生」のためのプロセスデザインであり、次の社会を見据えた試行でなければならぬと感じています。



Disaster Re-Design in Abroad

Richard Martin Rinen

University of the Philippines
Kyoto University

Understanding disaster prevention particularly flood mitigation starts with learning from past experiences. History should not repeat itself. We should always look for better ways in order to achieve a goal beyond just recovery. We must exceed all expectations. Thank you.



小さな学びの復興

乾 久美子

乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学

復興は通常とは違うプロセスをふむプロジェクトが多くなるように思います。そこに可能性を見いだせると素晴らしいと思っています。



復興現場の政策論・復興研究論文賞 審査委員

菊池 雅彦

国土交通省

復興に携わり知見の体系化と継承の必要性を痛感しており、この復興デザイン会議が研究・実務・行政を結び、次の復興の礎になることを期待しています。



小さな学びの復興・復興政策計画設計賞 審査委員

千葉 学

東京大学

復興において建築家に必要なことは、実は日常性の中でも変わらないと思う。当事者意識を支える豊かな想像力、建築を取り巻く人、経済、社会、環境に対する解像度の高い観察力、それに尽きる。



復興研究の萌芽・全体審査委員会委員長

本田 利器

東京大学

復興デザインは、復興から百年を超えて続く社会を創るもので、未来に対する責任を負うという覚悟で最善を尽くすことが必要なのだと考えています。

審査委員



復興政策計画設計賞
審査委員

秋田 典子

千葉大学



復興研究論文賞
審査委員

大月 敏雄

東京大学



復興政策計画設計賞
副審査委員長

小野田 泰明

東北大学



復興政策計画設計賞
審査委員

窪田 亜矢

東京大学



復興研究論文賞
審査委員

小林 祐司

大分大学



復興研究論文賞
審査委員

田島 芳満

東京大学



復興研究論文賞
審査委員

田中 貴宏

広島大学



復興政策計画設計賞
副審査委員長

徳永 幸久

国土交通省



U-30 復興デザイン
審査委員

桒澤 麻利

SALHAUS



U-30 復興デザイン
審査委員長

内藤 廣

建築家
東京大学名誉教授



復興政策計画設計賞
審査委員長・ほか各賞審査委員

羽藤 英二

東京大学



復興政策計画設計賞
審査委員

廣井 悠

東京大学



復興研究論文賞
審査委員

円山 琢也

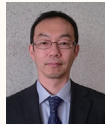
熊本大学



U-30 復興デザイン
副審査委員長

宮城 俊作

PLACEMEDIA
東京大学



復興研究論文賞
審査委員

森脇 亮

愛媛大学



復興政策計画設計賞
審査委員

山口 敬太

京都大学



復興政策計画設計賞
審査委員

渡部 英二

東急建設株式会社

大会実行委員



運営幹事

井本 佐保里

日本大学



実行副委員長

小川 紀一郎

アジア航測株式会社



実行副委員長

小田 秀樹

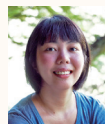
復建調査設計株式会社



運営幹事

小野 悠

豊橋技術科学大学



運営幹事補佐

柴田 純花

東京大学

復興研究論文賞 受賞者

審査員（敬称略）

審査委員長：原田 昇（交通計画）

大月 敏雄（建築計画） 菊池 雅彦（復興計画） 小林 祐司（避難行動）
佐藤 慎司（海岸計画） 田島 芳満（海岸計画） 田中 貴宏（都市計画）
羽藤 英二（都市計画） 本田 利器（地震工学） 円山 琢也（交通計画）
森脇 亮（環境工学）

審査総評

国内外の復興に取り組んでいる個人、自薦・他薦合わせ 27 名の応募者に関して、彼らの主要論文・関連論文を推薦理由も参照し、11 名の審査員で評点付け、審査委員会にて受賞者を決定した。復興に関わる学術的な理論や研究方法論の構築、知見や技術の体系化など、多彩な研究者の中から、復興デザインへの貢献や地道な継続を重視しての選定となった。この論文賞の取組みが、復興研究の多様な展開を推し進める一助となることを期待する。

審査委員長 原田 昇

最優秀賞



乾 康代

経歴 奈良県生まれ、大阪大学文学部哲学科（ドイツ哲学）卒業、ドイツ系企業勤務の後、大阪工業大学工学部建築学科卒業、京都芸織維大学大学院修士課程修了、大阪市立大学大学院博士課程単位取得退学、博士（学術）。茨城大学教育学部助教授、教授。2019 年 3 月退職。

最優秀論文賞をありがとうございました。東海村の原発は住宅地に取り囲まれています。住民の安全より原子力施設立地が優先された東海村の歪んだ地域開発の研究に着手して 10 年。東海村から、廃炉後の地域再生のあり方を求めてドイツ、イギリスへと調査をすすめてきました。利益誘導マネーに依存せず自立した地域、持続可能な地域をどのように描くのか、地域の方々とともに考え続けていきたいと思っています。



牧 紀男

経歴 1968 年和歌山県出身。1997 年に京都大学大学院工学研究科で博士（工学）を取得。1998-2004 年地震防災フロンティア研究センター研究員。2005 年京都大学防災研究所准教授、2014 年一京都大学防災研究所教授。著書「復興の防災計画」「災害の住宅誌」（鹿島出版会）他。

復興組織というマニアックな論文に対して、第一回目の復興デザイン会議全国大会「復興研究論文賞」という栄えある賞をいただきありがとうございます。人口減少社会における「防災」を考える上で復興ということは、非常に重要な課題だと考えております。



優秀賞（若手：35 歳以下）



鈴木 さち

経歴 現在、ユネスコジャカルタ事務所日本信託基金コーディネーターとして勤務。東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻博士課程単位取得退学（博士）。同大学修士課程修了、学士課程卒業。

今回、復興デザイン会議を開いて頂き、また賞を頂き感謝しております。今後、どのような場所や環境で働くとしても、多様なステークホルダーによる災害復興やより良い居住環境の計画といったテーマを追い続けたいと思います。



萩原 拓也

経歴 1989 年愛知県出身。2014 年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。㈱日本設計（都市計画群）勤務、東京大学大学院学術支援職員を経て、2019 年より東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻／復興デザイン研究体特任助教。

この度は、「復興研究論文賞」優秀賞を頂き、誠にありがとうございます。地域が繰り返す災害に対して如何に適応してきたか、を考えることを通して、災害・復興・日常をつなぐ計画・デザインに貢献できればと思います。



奨励賞（学生）



益子 智之

経歴 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻博士後期課程 3 年、日本学術振興会特別研究員 DC1／1990 年大阪府生まれ。2014 年早稲田大学創造理工学部建築学科卒業。2017 年同大学院創造理工学研究科建築学専攻修了。修士（建築学）。専門はまちづくり、都市計画。

このたびは、復興研究奨励論文賞を賜り、誠にありがとうございます。指導教員やイタリアの共同研究者、交流のある若手復興研究者など多くの皆様に心から感謝いたします。今後も、復興研究に寄与できるようにイタリア震災復興の研究を丹念に続けていきたい。



渡邊 萌

経歴 熊本県出身。2017 年 3 月熊本大学工学部卒業。2019 年 3 月熊本大学自然科学研究科博士前期課程を修了。2019 年 4 月より熊本大学自然科学教育部博士後期課程に在学中。

この度は奨励論文賞を頂き誠に感謝申し上げます。受賞対象の論文は、益城町役場や多くの大学生ボランティアの方々と共同で実施した仮設住宅聞き取り調査に基づくものであり、関係者に改めて御礼申し上げます。現在も益城町を対象に活動を継続しており、復興現場の解決課題の一助となる研究成果につなげたいと考えております。



U30 復興デザインコンペ 1 次選考通過者

審査員（敬称略）

審査委員長： 内藤 廣（建築家）

副委員長： 宮城 俊作（ランドスケープデザイナー）

姥浦 道生（復興制度研究者） 千葉 学（建築家）

栃澤 麻利（建築家） 羽藤 英二（都市工学者）

U30 へのメッセージ

豊かな自然に恵まれたこの国は、同時に諸々の自然災害に見舞われる変動要因の多い国土を持っています。自然災害は、日常生活を脅かし社会に揺さぶりを掛けます。一方で先人たちは、これらを受け入れる中で技術を磨き、わが国独自の文化や風土を形成してきました。今を生きるわれわれも、常に切磋琢磨することを求められています。若い世代は、勇気と熱意をもってこれに挑んでもらいたい。

審査委員長 内藤 廣



見慣れた景色
見慣れない風景

立花 和弥（熊本大学）

熊本地震から 3 年半が経過しましたが、本来長い時間をかけて解決すべき様々な課題が一気に押し寄せてきたような感じがしています。それでも逆境にめげずに立ち向かい、改めて建築とは何かという問いを追い続けます。



佐田岬を継ぐ

飯塚 卓也 小山 晴也
畠山 亜美 小松 航樹
村田 夏菜子（東京大学）

佐田岬半島に点在する 55 の集落に、生業を支えた美しい風景が広がる伊方町。本提案では、各集落に住みたい人を最後の一人まで受け止めることのできるまちを目指し、常時からの繋がりが災害時にも機能するまちのあり方を示した。

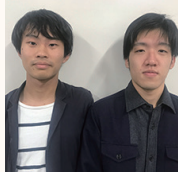


白浦再耕

愛媛県宇和島市玉津地区白浦における南海トラフ地震事前復興

森崎 慎也 小林 史香
新山 雅人 出原 昇馬
山本 奏音（東京大学）

地域の持続には、被災後も人々が地域に関わり続けられる選択肢が多いことが大切だ。被災前から、地域らしさを活かしながら土地利用を組み合わせることで、災害リスクを軽減しつつ、人々が多様に関われる空間を目指した。



サイクリングロード計画
つないで守る明るい浜

拜師 涼太 木原 拓海（愛媛大学）

日常時も災害時も機能する「事前復興」というコンセプトの計画です。地元大学の強みをいかし、WS やヒアリングを通して地域特有の課題と魅力を調べることで、地域住民に寄り添った計画になるよう心がけました。



海と都市と向き合う暮らし

愛媛県八幡浜市における事前復興計画の提案

宗野 みなみ 石井 健太
久野 遼 竹中 信乃（東京大学）

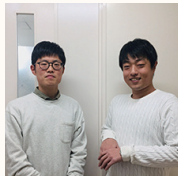
愛媛県八幡浜市は南海トラフ地震の危機にさらされている。この街で都市としての安全性を高めつつ、なお海と向き合って暮らしている街の構えの実現を目指し、建築・交通・都市の各面からトータルプランを提案した。



南予復興 Base 宇和島

天野 裕維 泉 翔太
渡部 達也（愛媛大学）

宇和島市の三間地区は好立地のため、災害時の復興拠点としてのポテンシャルを感じた。そこで、三間地区を防災拠点とし、生業 BCP や伝統文化を考慮した、地域密着型の事前復興計画「南予復興 Base 宇和島」を検討した。



漁業が“繋ぐ”
宇和島の未来

叶井 和樹 門田 昌也（愛媛大学）

宇和島市の主要産業である漁業および水産加工業に着目しました。受け継がれてきた文化や伝統を津波災害によって衰退させてはならないという気持ちから、2 つの生業に関する事前復興案の提案に至りました。



家串集落事前復興計画

みなでつくる「庭」のある暮らしの提案

砂川 良太 神門 侑子
松岡 央真（東京大学）
伊藤 滉彩 平林 航一（早稲田大学）

東京から家串までいくのは案外大変です。しかし、訪れるたびに来てよかったと思える場所です。集落で出会った人々の顔や生活を思い浮かべながら、これから何回も案を練り直していきたいです。



豊橋事前復興計画

児玉 欣輝 藤岡 歩 本間 聖也
Lim Jia Yen 岡本 亮太
小松 薫芽 毛利 智明（豊橋技術科学大学）

30 年以上前から「いつか大災害が来る」と言われてきた豊橋。この事前復興計画を通し改めて豊橋の未来を考える。“未来の豊橋をより良いまちに”技科大生が描く豊橋の将来像を楽しくご覧下さい。



遠まわりするまち

佐島 蒼太郎 岡村 壮真
北島 萌絵 中岡 桃子
福田 暁子（東京大学）

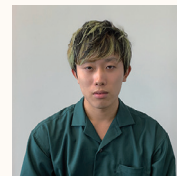
私たちは水害にあった野村町において、既存の復興計画を土壌として、外部からの視点を加え、まちの資源を生かし、あえて水とまちとを再び近づけることで遠回りながらも豊かなまちの将来像を描きました。



余白で紡ぐ
未来への復興

野上 宏樹 藤江 教貴
朴 常豪 米澤 実保
羽佐田 紘之（東京大学）

インフラ整備は数十年のスパンで計画される。一方で災害はいつ起こるか分からない。この 2 つの時間軸をポジティブに捉え、災害リスクを減らしつつ未来へと紡ぎ合わせていくのが「つくる余白」「生かす余白」である。

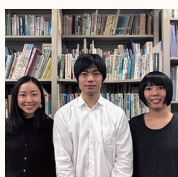


体験から広がる
新たな街の拠点

フェーズによって可変する空間
～ 続・建築合宿

和賀 和弥（日本工業大学）

私たちの当たり前前に過ごす日常が急激に変化したら。廃校で寝泊りする経験から、一つの場に寝食住が完結する窮屈さがあった。災害時と日常時の行動の違いから、それを解決する廃校の潜在的可能性を示唆する。



水と共に生きるまち

芝原 貴史（乾久美子建築設計事務所）
小関 玲奈 柴田 純花（東京大学）

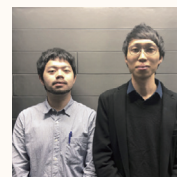
3.11以降、原発事故のリスクが強く認知されました。しかし、廃炉に至るまで地域はそのリスクと向き合う必要があります。島根原発事故からの避難を想定し、松江の多様な地形・水との関わりを下地として、平時と非常時の空間のあり方を考えました。



表裏一体の自然といきる

小粥 慶子 中島 直弥
猪股 誠野

各々被災地と関わる中で、事前復興の重要さと難しさを議論してきました。事前復興の実現には、災害を日常から切り離さず、恵みと災いの両方をもたらす自然との付き合い方そのものを考え直すことが重要だと思います。



水がみえるまち

三輪 潤平 中津川 銀司（日本設計）

私たちは、事前復興の提案を通して復興デザインについて考えました。普段の生活の中に当たり前にあるインフラ、なかでも特に目を背けてしまいがちな下水道に着目し、その転換を含む、水と共にある暮らしを考察しました。

（受付順）

復興政策賞 / 復興計画賞 / 復興設計賞

審査員（敬称略）

審査委員長： 羽藤 英二（都市工学）
副委員長： 小野田 泰明（建築計画） 徳永 幸久（都市計画）
赤川 俊哉（都市計画） 秋田 典子（ランドスケープ）
窪田 亜矢（地域計画） 千葉 学（建築設計）
廣井 悠（防災計画） 山口 敬太（土木計画） 渡部英二（復興事業）

審査総評

最近10年のうちに各地で取り組まれた復興に関わる政策・計画・設計について網羅的な調査を行い、未だ途上のものを除く候補の中から、8人の審査員が現地を見て回り、議論を尽くして審査を行った。政策を判断し、計画をつくり、設計から竣工へ、当たり前の仕事をつないでいくことが困難な状況下で、地域の暮らしの営みを読み解き、卓越した専門性と献身的な行為に支えられた意思のある仕事を選定した。復興政策賞・復興計画賞・復興設計賞の受賞各位に敬意を評したい。

審査委員長 羽藤 英二

復興政策賞

くしの歯作戦

国土交通省東北地方整備局

事業概要 津波により孤立した沿岸部への救命・救援ルート確保のため、東北地方整備局を中心に関係者が連携し、内陸部の東北自動車道と国道4号の「縦軸」から「くしの歯」のように沿岸部に伸びる15ルートもの国道を開通。沿岸の国道45号は3月18日までに約97%が通行可能となった。

被災地の救命活動や緊急物資等を届けるルートを確保するのが「くしの歯作戦」です。発災後、概ね1週間でも東北地方内陸から太平洋沿岸地域を繋ぐ縦横軸となる道を切り開きました。現場で従事いただいた地域の建設会社、自治体、自衛隊、警察等、各機関の連携の賜であり、あらためて感謝を申し上げます。



復興計画賞

中越メモリアル回廊

公益社団法人 中越防災安全推進機構

事業概要 中越メモリアル回廊を設置・運営。中越メモリアル回廊は、長岡震災アーカイブセンターさおくみらい、おちや震災ミュージアムそなえ館、やまこし復興交流館おらたる、川口さすな館、木籠メモリアルパーク、妙見メモリアルパーク、震災メモリアルパークで形成される。

「中越まるごとアーカイブ」の合言葉のもと、できるだけ現場の保存につとめた。また、中越メモリアル回廊をまわることで中越地震の教訓をより深く知ってもらえるよう工夫をこらした。加えて、復興まちづくり、地域づくりに貢献する施設を目指した。



宮古市の復興まちづくり計画

岩手県宮古市

事業概要 地区住民が計画を取りまとめ、市長に提言する「検討会立ち上げ型」および、地区住民との意見交換会や個別意向確認を行う「全体協議型」により示された計画を、市が可能な限り尊重、検討を行い、復興まちづくり計画を策定した。

住民の皆様と共に計画策定に取り組んだことで、後の事業展開を円滑に進めることができました。今回の受賞は、住民の皆様が多忙の中、計画策定に参画していただいたこと、大学の先生をはじめ関係機関の皆様のご支援ご指導の賜物と感謝しております。



復興設計賞

釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館

有限会社乾久美子建築設計事務所 株式会社東京建設コンサルタント

事業概要 被災した児童館、小学校、中学校の建て替え計画。海岸沿いの小さな漁業集落と子どもたちによりそえるヒューマンスケールな学びの場を生み出すよう、土木と建築の制度や文化を乗り越えた、一体的な計画を目指した。

住民の方々、釜石市の職員の方々、復興ディレクター、施工者など、多くの方の尽力があって初めて、やさしく、楽しく、安心感のある環境が生まれたと感じています。その努力をみていただけたのかと想い、感謝しております。ありがとうございました。



高田松原津波復興祈念公園 国営 追悼・祈念施設

株式会社ブレック研究所・ 株式会社内藤廣建築設計事務所設計共同体

事業概要 東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記録と教訓の後世への伝承を目的に、国・岩手県・陸前高田市が連携して整備した津波復興祈念公園。国営の追悼施設、県営の博物館、市委託運営の道の駅が一体となって整備されている。

「海へ想いを馳せること」と「明日を生きること」、この二つを計画の中で実現することを目指しました。海へと向かう「祈りの軸」と震災遺構から道の駅に至る「復興の軸」を設定し、実現に向けては、関係諸官庁、平野勝也東北大准教授と篠沢健太工学院大学教授とともに計画を進めました。皆で受賞をよろこびたいと思います。



十津川村復興公営住宅

十津川村（代表）

事業概要 2011年9月の紀伊半島大水害で被災した奈良県十津川村は、十津川産材を活用し、気候風土・生活文化に根差した木造戸建の復興公営住宅を、村の安全・安心拠点である谷瀬・高森集落に、大規模な造成を行わずに13戸建設した。

奈良県・十津川村・村づくりアドバイザー・コンサルタント・設計事務所がチームを組み、村づくりの戦略を検討しながら復興事業を推進した。現在でも集落活性化や高齢者福祉、林業の6次産業化などの取り組みが進んでいる。

